

1 自己紹介

宇部常盤会の品川博会長から突然の電話があり、私の趣味について宇部常盤会のHPに投稿を願いたいとの事であった。

仕事のことであれば大したこともしていないのでお断りするのだが、趣味などの「余暇活動」については本業以上に楽しんできているので、駄文を顧みず品川会長の上手な誘いに乗ることにした。

まずは自己紹介。

電話口で「名前は崖（ガケ）です」と言うと初めての相手は大概「・・・？」となる。そこで「崖崩れのガケです。」と言うと、周りの同僚が笑うがこれが一番相手に伝わる。姓が珍しくて読み難いが、その分、一度で覚えていただけるようで、時々新聞に名前が出ていたと知人から連絡がある。新聞に姓が載るとすぐばれるので悪いことができない。

生まれは宇部市で小学4年生から新聞配達を始め、宇部高専入学後は3年まで牛乳配達を続けた。高専在学中は柔道部、高専大会が始まると陸上部（砲丸投げ）も、若くて綺麗な女性が顧問なのでドイツ語研究同好会へ、卒業アルバムを見ると自動車同好会でも写っていた。

就職は国鉄へ。主に機関区系統の職場や業務を歩むが国鉄時代20年で転勤10回、民営化でJR貨物会社に移行後は17年で8回の転勤あり。余力あるうちに地元のためにと定年前の57歳で退職する。ハローワークで仕事を探し、異業種の小さな建設会社に労務担当として就職。65歳の定年まで勤める。定年退職後はパートで1年近く呑気にしていたが、お世話になった労務士さんの要請で障害者福祉施設で1年間労務管理のお手伝い。昨年10月末に退職してからは在職中に余暇活動で始めた趣味のいくつかを極めるべく精進中。

余暇活動のきっかけは国鉄入社時、国鉄再建のためには価値観の違う国鉄以外の人と交流することの必要性を感じ、青少年活動（現在のボランティア活動）に飛び込む。以後、転勤の度に新しい活動や趣味にチャレンジして地元の方々と交流。いくつかを紹介すると、更生活動、手話、ゴルフ、詩吟、献血・・・バードウォッチング・・・寒蘭栽培等々。最初の更生活動を行っていた昭和46年25歳の時、総理府主催の「第5回青年の船」に乗船し、2ヵ月に渡って東南アジア6ヶ国へ親善訪問の機会を得た。数々の余暇活動で新しい世界を知る感動は素晴らしく、今も多くの知友と交流をいただいている。これらの活動で得た経験や多様な考え方は、「芸は身を助く」のように本来の仕事にも大変役に立った。

2 高専在校時の思い出

52年前の昭和37年3月の中学校卒業当時は、大学への進学率は2割程度であったかと記憶しているが、多くの家庭が貧しく、我家もご多分に漏れず大学に行く余裕などなく、私も工業高校に行って就職と決めていた。中学3年生になった頃、「地場産業で中核となる技術者を養成、5年で高校と技術系大学の科目を習得」といううたい文句（だったように記憶している）で国立の工業高等専門学校が全国で一期校として12校できることになった。中国地方で宇部、九州で佐世保、四国で阿南が一期校として開校されることになり、幸い地元の宇部にできることで貧乏でも行けるなど思い応募す

ることにした。期待が大きかったのか県内のみならず近県からの受験も多く、また、大学進学組が腕試しでの受験もあってか受験倍率が17倍余あったが、幸いに合格した。

余談になるが、現在103歳になる母が同居している。98歳まで畑仕事をし、100歳の誕生日までベッドに座って手編みをしていたが、この頃は車椅子での生活で下の用などは女房の介助を要するが、食事は自分で茶碗と箸を持ち食べることができる。最近は夢で見た来客を目が覚めて「今誰々さんが来た」などと夢と現実が混濁するようになったが、尋常小学校の各学年の担任先生や校長の名前、また学校で褒められたことは今でも淀みなく出てくる。

しかし、この2月頃から私を見て「お父さん」と呼ぶ。私を息子としてではなく自分の父親と認識し始めている。その母が、1週間前にも「登司之(私)が宇部高専に合格したんだよ。嬉しかった。」と私に話す。目の前の息子は判らなくなっても、息子の宇部高専合格は最高学府に合格したように余程嬉しく記憶されているのだろう。

前書きが長くなったが、高専在校時の思い出は、入学時にはまだ高専の教室や運動場もなく、宇部工業短大の校舎で授業を受け、クラブ活動の柔道は山大工学部のグラウンドにマットを持ち出して練習をしていたことなど、ナイナイ尽くしではあったが一期生として新しく創っていく楽しみが全てにあった。

先生方も新しい制度の学校に情熱をもって来ておられ、中学時代とは違い自由な雰囲気があった。

豊浦高校の校長の職から、新しい学校作りに情熱をもって来られた小川五郎先生は授業中「君たち高専生は生徒ではなく学生である。」「君たち技術者は教養を身に着けるように。」「詩人中原中也の生涯は・・・」などなど熱く話され、中学を卒業したばかりの私の能力では理解できない戸惑いがあったが技術者としてまた人として大事な素養を教えられた。

特別講義で来られていた小野田高校の美術の縄田先生は「絵の前に立つと感動する。この絵の作者が絵筆を持って立っていた位置に僕も立っていると思うと嬉しくなる。」と話されていた。この言葉が印象強く残る。絵の価値の話はされなかったように思うが絵の作者と場を共有する楽しみ方を教わった。就職した後、転勤先で美術館巡りを楽しむことになる。絵の価値はわからないが、一時は絵を見て、作者が何歳の時に画いたのかを1~2歳の範囲であてることができるようになり、年齢による作風の変化を自分の生き方に重ね合わせたりもした。

是非書いておきたい先生がもう一人、体育の中山克彦先生。高専1期生入学時からの先生である。たしか日体大を卒業間もないときであったから年齢の多い先生方の中では私たちの兄貴のような存在であった。背丈も15歳の私たちと同じ(?)なので大変親しみを持てた。しかも、丸っこい身体の中はエネルギーの塊で、鍛えられた肉体は強靱な精神とジェントルマンシップを伴っていたのである。柔道やラグビーなども体育の授業で0から指導を受けたが、課外の部活動でも疲れを知らないタフさで指導を受けた。かくして3年生になった頃は近郷で強豪の部になっていた。先生の明るくてフェアな精神は宇部高専生の多くがその遺伝子を受け継いで巣立ったと確信している。

3 社会での悪戦苦闘の思い出

1回生の就職にあたって各企業からの求人はさほど多くなかったと記憶している。新しい高専制度で初の卒業生は、企業にとって海の物とも山の物ともわからない訳だし、様子見もあったかもしれない。しかし、翌年から求人が増加したことは「高専生はお買い得」と評価されたのだろう。

昭和 42 年 4 月 1 日、国鉄に宇部高専から 7 名が就職した。高専の設立の趣旨（地場産業の中核技術者）にこだわっていた私も地域に貢献できる輸送機関なので国鉄を選んだ。全国の高専から採用された 100 名近くが共に東京で 1 年間の机上及び実習教育を受け、翌年、全国の職場に配属となり、私は下関運転所に配属。そこで機関士として列車の運転や電気機関車の検査業務を 7 年間実務することになる。

入社当時の国鉄の状況は、2 年半前の東海道新幹線開業の年に経営は赤字に転落していた。東京オリンピックと同じ年度である。また、労働運動が激しく多くの現業機関で賃上げストライキやストによる処分撤回運動などの労使紛争があった。特に機関区は機関区職員の多くが所属する労働組合が他の労働組合より闘争が激しかった。

希望に燃えて入った職場がこのような状況なので、何が問題でこうなるのかと疑問を持ち、国鉄に関する本や雑誌を手当たり次第に読んだ。そして、自分なりの結論が、国鉄職員が部外の人と接することがない閉鎖社会ということだった。

明治 5 年に我が国に鉄道が開業以来、その当時に 100 年近くになり、また、敗戦後の復員兵の受け入れもあって国鉄職員は 50 万人を超えており、ほとんどの業務が国鉄内部で完結していた。部内の価値観だけで日々の業務は遂行でき、経営も「親方日の丸」の代名詞で評される通りであった。

そこで、価値観の多様な部外の人と接することを目標としたのであるが、これが余暇活動を始めの動機となる。そして自己紹介で紹介した余暇活動にのめり込み、一時はミイラ取りがミイラのようになるのである。

話は戻って、当時、国鉄の採用学歴別（技術系）の昇進は大きく分けて 3 パターンであった。東大卒などの本社採用組（列車にちなみ特急組と称した）は駅や機関区の現業業務を 2 年ばかり経験後、本社で調査計画管理業務を数年行い、再び現業期間の長として赴任。その後は本社や管理局の管理部門の長を歴任する。

地方大学卒（高専卒も含む、準急組と揶揄）は管理局採用としてスタートし、機関区や車両所、電力区などで機関士や検査係の実務を数年経験後、管理局で運行計画業務等を行い、再び現業期間で助役などの管理業務を担当。その後、管理局で管理業務を担い、最後は現業機関の長を歴任するのがパターン。

高卒は管理局採用（各駅停車組と揶揄）でスタートするが、昇職は試験制度であり、合格後に営業係や機関士・検査係など現業の業務を担っていた。助役や現場長もチャレンジできたが、当時は労働運動が激しく、管理側となる助役や現場長に応募するのは極めて少なかった。

ミイラ取りがミイラになったように余暇活動（現在のボランティア活動）に没頭していた 28 歳の時、広島鉄道管理局へ転勤の話があった。就職時に東京・大阪や広島などの大都会ではなく地場産業で働く決めていたので、広島へ転勤ならば辞職する覚悟でいたところ現場長（旧工専卒）から呼び出され、「宇部高専の一期生が辞めて、誰が後輩の面倒を見るのだ」と説得された。止む無しの気持ちでの広島転勤であったが、転勤しても余暇活動を続け、そこで国鉄以外の地元の人と接する場を持つと心に決めた。

広島鉄道管理局に転勤した年の昭和 50 年に国鉄の全列車を 10 日間連続して止めたストライキ（いわゆるスト権スト）があった。当時、日本経済は、鉱物資源などの重くて大量の鉄道輸送形態から多様少量物資のトラック輸送へとニーズが変わりつつあったが、国鉄の労働組合がスト権を得るための

威信をかけてのストであった。

しかし、これによって特に貨物輸送は鉄道からトラックへとシフト替えとなっていくのである。近くでは、宇部興産(株)の興産専用道路が美祢から宇部まで建設されることになり、列車で輸送されていた石灰石やクリンカーの全てがトラックで輸送され、鉄道輸送の命運を止めてしまう結果となった。また、国鉄・郵政・電電の3公社のトップを切って国鉄からJRへと民営化の準備が進められることにもなるのである。

管理局で機関車の運行計画業務を経て、運転業務従事者の適性を調べる考査員の業務を担っていたが、34歳の時、労働運動で闘争の激しかったある機関区へ若い助役として赴任することになる。当時、当局の生産性運動(いわゆる〇生)が瓦解の体をなして、労働運動の激しい職場では助役が心痛に耐えられず自殺したところもあったが、私の前任者は定年前に辞めていた。そこで若い私なら辞めないだろうということと堅物だった私が上層部から煙たがれていたからと後日上司から聞く。

事前に管理者としての教育を受けたこともなく、いきなり300人もの乗務員の指導責任者として見ず知らずの職場に白紙のような状態での異動発令である。

赴任した職場は、日常業務は労働組合の了解がなければ進まない状態で、何かトラブルがあると若い組合員が多く見ている前で、助役が組合役員からつるし上げられる始末。しかも、その職場は労働組合が3つあり、それぞれが反目する労々問題ありで管理側としてはまさに荒廃した職場の感であった。

しかし、事あるごとに組合員の話聞き、問題点を考察してみると管理側が問題発生に対して適切に対応処理していないことが、結果的に組合主導となり管理側の管理不能の状況に至っているのがあった。それが悪慣行の数々となっていた。それに対し本社など上部機関から現場の管理者を支援する追い風はなかった。根本的には労働組合側に問題があるのではなく、管理側に問題があることが分かった。

私は管理側の立場であったが「職場の問題は管理側に責任がある」の視点を持つことになる。

不思議なものでボランティア活動をしていた経験が職場運営に役立つのである。そして次第に職員との協力を得て、握られていた拳を小指から一指ずつ開いていくように職場の悪慣行の是正も少しずつできた。

赴任して3年目の年に国鉄が分割民営化されるという話が職場に伝わって来た。現場の職員は半信半疑というよりよそ事だろうの受け止めであった。そしてようやく本社が現場管理者にとって追い風となる「職場規律の是正」を掲げた。

次の時刻改正で輸送減による列車本数の削減と共に余剰人員が各職場で発生し、翌年に転勤した職場は90余人の内70人近くが余剰人員であった。マツダ自動車など民間企業への出向も始まり、職員はよそ事のような受け止めから次第に目の前の現実として不安感を抱き始める。

新聞は国鉄の職場規律の悪さを日増しに書き上げ、民営化を支援するための「国鉄たたき」の体であった。新聞で叩かれる悪慣行もあったが、赴任した職場では「国鉄職員はまじめ」と言われたように働く同僚から尊敬される捧心が必ずいて、多くの職員は不安を持ちながらもすべき仕事はキチンとしていた。すべてが悪慣行のような記事に腹が立った。

民営化までの4年間は毎年転勤となるが、いずれも労働運動の激しいところで名が知られている職場ばかりであった。赴任して驚いた。悪慣行のいくつかが残っていた。追い風があっても管理者にやる気がないと職場は変わらないものだと感じる。

いずれの職場も、最初は職員に構えて迎えられたが、半年も経つと職員から「慣行の是正など、あなたに真綿で首を絞められるような感じで」と笑いながら言われるようになる。気心が分かり始めるとともに職場の様子も変わり始めた。2年目は感謝の気持ちを込めて職場作りをしようと思うも、1年でまた転勤となり職場の皆さんに申し訳ない思いをした。激動期の会社の無情な人事で、いずれの職場もわずか1年の在籍だったにもかかわらず、お世話になった方々と今も賀状が続いている。

JR移行直前の国鉄最後の異動で私はJR貨物会社となる職場に配属となった。そこは管理者として初めて赴任した職場であり、今回が2度目の勤務となる。3年前その職場を転出する時は乗務員以外の職員も含め500人を超していたが、貨物列車の運転本数の削減等で今回は300人ばかりの職場になっていた。さらに、1ヶ月後のJR移行時にこの職場に残る者が1/3、JR西日本旅客会社へ転出するものが1/3、そして退職を選んだものが1/3の割合であった。退職を選んだ者は気骨のある優秀な社員も多かったが、景気も悪く再就職が決まる者はほとんどない状態であった。

3月31日の国鉄として最後の朝礼時に、退職組と転出組の代表がお別れの挨拶をしたが、転出組の挨拶に対し「石を持って追いたかった」と述懐した残り組にも複雑な思いがあったのである。翌、昭和62年4月1日のJR移行に際し、新しい会社は社員にこのような3者3様の悲しい思いを決してさせてはならないと思ったのである。

JR貨物会社へ移行後は8つの職場を転勤し、終わりの3つは広島機関区長などの現場長を歴任する。負の遺産を多く引き継いだJR貨物会社は、国鉄時代の考え方が色濃く残っていたが旅客会社に負けじと、民営化後の職場の活性化や基盤づくりを社員と意気合い合いと取り組んだ。

そして57歳到達時に、余力があるうちに高専の設立趣旨である「地場産業の中堅技術者」として貢献したいとの思いとJR移行時に辞めざるを得なかった気骨ある職員の生きざまが重なり、JR貨物を定年前に退職した。地元の異業種となる中小企業でチャレンジすることになる。

国鉄の分割民営化は大きな改革であり、それ故に現場の職員の人生を大きく変えた。当時、現場の管理に携わっていた者として、その様子を少しなりともの思いで書き記した。

4 旧工専卒の現場長から言われた「1期生として後輩の面倒をみる」について。

国鉄で昭和52年度から56年度の4年間、クレペリン検査や運転適性検査を行う業務に従事していた際、職員の採用試験にも関わっていた。

大卒や高専卒であっても高専としての資格採用になる過年度採用者に高専卒生が多くいることが分かった。宇部高専卒だけでも30人いた。

国鉄は試験による昇職制度があり、高専であっても試験に合格して3年間の部内学園教育を修了すると大卒と同等の資格が得られた。

そこで、過年度採用の後輩達を訪ねてこの試験を受けるよう勧めた。何人かがこれにチャレンジしたと風の便りに聞いたが、現場に転勤して上記の孤軍奮闘中で余裕もなく、また、民営化で会社も別々になり、その後の消息は分からなかった。それが先般の宇部高専設立50周年記念大会の会場で、「あの時、声をかけられて試験を受けて学園に行き、今はJR西日本の〇〇にいます。」とある後輩から声をかけられた。1期生として後輩の面倒をみた機会は何一つなく、声掛け程度しかできなかったが後輩のその後の活躍が分かり嬉しかった。

5 野鳥に興味を持ち、趣味としてのめり込んだ経緯

仕事で転勤の度に新しい余暇活動を始め、地元の方と交流を図ることを続けていたが野鳥との出会いは、JR貨物に移行して4年目の初夏である。

職場は社員の活性化や増収活動にも取り組んでいたが、その一環で一般の人を誘っての九重登山バス旅行があった。その時、参加者の女性から電線に止まっているスズメぐらいの大きさの鳥（カワラヒワ）を双眼鏡で見させてもらったのがバードウォッチングの最初の出会いである。

特に感動したわけでもないが、半年後の1月に、広島市の太田川であった探鳥会に野次馬程度の気持ちで参加した。そこでスコープで見た鳥にびっくりした。ハトぐらいの大きさの鳥（タゲリ）であったが、頭にモヒカンのような冠羽があり「こんな鳥が日本にいるのか」と驚いた。当日の探鳥会で確認された野鳥は29種で、スズメやツグミなど知っている鳥もいたが殆ど初めて聞く名前の鳥であり、カワセミなどいろんな野鳥がいるもんだなと感心した。

そして日本野鳥の会に入会、当時45歳。天体用の双眼鏡を持っていたが、野鳥の顔の模様や羽の色まで鮮やかに見える30倍のスコープの威力に我慢できず2か月後にはスコープを買ってしまった。道具が揃うと益々使いたくなるのが人情。

広島の探鳥会はほぼ毎週どこかで開催されていた。単身赴任中であったが、妻には広島に居る時に広島の野鳥を見ておきたいと言い訳し、日曜日は帰省せず広島の探鳥会に1年間ほぼ参加した。

なんでもそうだが新しいことを始める時は知っている人に習うのが習得の早道。特に野鳥は植物のようにジーンとしておらず動くから一瞬が勝負。ベテラン会員は野鳥を一瞬見ただけで、一声聞いただけで鳥の名を当てる。バードウォッチングを始めて最初の1年は、探鳥会に参加して野鳥の棲む環境や姿形・鳴き声で種を見分けるポイントなどをベテラン会員から聞くのだが、10mも歩くと今聞いた鳥の識別ができない有様。

それから大阪へ単身赴任、阪神大震災に遭うまでの2年間宝塚の寮に住むが、ここで帰省しづらい事を口実に野鳥の世界にのめり込むことになる。休日には野鳥の会の探鳥会に参加、特に六甲山の東端位に位置する甲山は近いのでマイフィールドにして毎週通った。

甲山には10数人の探鳥グループがありその仲間に入れてもらい、野鳥観察の楽しみ方やマイフィールドの野鳥の生息を確認することの意義などを習った。たまたま、趣味でパソコンを独学し表計算ソフト「ロータス123」を使えたので、野鳥の会兵庫県支部の野鳥生息調査のデータ入力と統計解析を手伝った。これがきっかけで野鳥生息調査が私の野鳥観察の楽しみ方となるのである。



カワラヒワ



タゲリ



スズメ



カワセミ

そして震災後、自宅の近くにどのような野鳥がいるのか調べようと思い立ち、宇部市の霜降山など近隣の山々や公園などの野鳥生息調査を始めた。20年間で調査箇所は20数箇所にもなった。特に霜降山は生息の比較ベースとしたので10年間連続調査し山頂まで240回登った。調査が多い年は休日では不足有給休暇を取ったりしたが、この20年間休日は殆ど野鳥の調査とデータ入力に費やした。

野鳥を眺めて何が楽しいかと思われるだろう。鳥は世界で約9000種生息しているが、人類は有名なネアンデルタール人等の旧人類が登場したのが数10万年前でまだ1種のみ。人類の直接の祖先と目されている二足歩行の霊長類でさえ数100万年前。始祖鳥は1億5000年前であり、長い年月による鳥類の進化に驚嘆させられる。

また、鳥も生き物であるから求愛をし、卵を暖めたり、雛の子育てや離別もある。そのドラマを垣間見て、体は小さいがその健気な姿に感動させられる。さらに、自然界の虫や実を食するので環境の変化に生息が著しく影響されるため、自然環境のバロメーターにもなっている。

野鳥観察の楽しみ方は、多様な野鳥そのものを見て楽しむバードウォッチングに始まり、野鳥の写真撮影、珍しい野鳥を追っかける珍鳥マニア、巣や羽の収集、俳句や和歌に詠んだり、私のように生息調査をしたり、自然環境保護活動など様々ある。

見る気で見るとかなりの種が人と身近なところに生息しているので見つけやすい、そんなことで身近で結構楽しめる。双眼鏡を肩にかけゆっくり歩きながら野鳥を見るのは最高の贅沢の一時となる。

日本で見られる野鳥は、迷い鳥などたまに確認された野鳥も含めて約550種と言われていた。鳥見を始めたころ、先輩から「その内、300種を見たらキチガイの部類に入る」と聞いていたが、私が300種を超えたのは20年を要した。しかし、最近はバーダーも増えデジカメの普及もあって、珍鳥がかなり確認されて650種掲載のガイドブックも発売されている。携帯電話の普及で鳥見歴3年未満で300種を超える珍鳥マニアも多くなり野鳥観察スタイルも様変わりしてきている。

今回は、私が野鳥に興味を持ち、身近な場所の野鳥を調べることにのめり込んだ経緯を紹介したが、次回から調査をした近隣の山々や公園の野鳥を主体にして、季節々の野鳥の魅力を4回程度で紹介したいと思う。

次回は「夏の野鳥」と題して繁殖の様子などを紹介したい。(写真提供 鳥友：塩見和彦氏)

5 現在の心境

国鉄再建には部外の人との交流が必要と思い至り、余暇活動に取り組むのであるが、それも転勤の度に新しいボランティア活動や趣味などの余暇活動を始めた。

部外の人と一緒に活動するなかで身についた多様な考え方や経験、パソコンなどの知識は仕事においても職場管理やパソコン導入などに大いに役立った。

仕事一筋の人生ではなかったが、仕事のためにと始めた余暇活動で人の2倍も3倍も新しい世界を知り、また、多くの知友を得ることができた。そして、心豊かな時間も持つことができた。それがあったから心の支えとして激動期の職場を切り盛りできたと感謝している。

チャレンジできたことや何事も誠実に取り組めたことも、また、多くの知友をいただいたことも、心の奥にいつも宇部高専第1期卒業生としての誇りをいただいていた故と感謝している。

高専卒業生として悔いはなかった。の心境である。

今後の掲載予定

第2回	『夏の野鳥』	H26.6頃
第3回	『秋の野鳥』	H26.9頃
第4回	『冬の野鳥』	H26.12頃
第5回	『春の野鳥』	H27.3頃

以上